

## 編集後記

図書館情報学の論文誌は、日本で出されているものだけでもいくつもあります。その中で、この *Journal of I-LISS Japan* がどのような役割を果たしていくのか考えるところがあります。

ただ、本誌の特徴の1つとして、チャレンジングな論文が掲載されているとは言えるでしょう。日本では、そのような研究の多くは各大学が発行する紀要に掲載されてきましたし、現在も掲載されているでしょう。CiNii の収録誌の増加と各大学の機関リポジトリの広がりに伴って、紀要論文が読まれることは以前より多くなっていることから、紀要論文の意義はあると考えます。しかし、紀要論文は査読がなかったり、あったとしても大学の中で行われていることが多く、つまり図書館情報学の研究者が査読を行っていることは少ないです。そして、紀要でブラインド査読が行われていることも少ないと考えます。

対して、本誌ではシングルブラインドで査読が行われます。そして、これはまだ編集委員や査読者の間で完全に共有できていないわけでは無いのですが、ふるい落としのための査読ではなく、投稿していただいた原稿に対して、どこをどう変えればより良くなるかという提案も合わせて回答しようと努力しているところです。本誌が多くのチャレンジングな研究をより発展させる場となることを目指していければと考えています。

そのような状況を踏まえ、今号から「査読内規」が整備されました。これは確固たるものが確定したとは思っておらず、今後も改訂がなされていくものだと考えております。

合わせて「機関誌の運用細則」が修正されています。修正は1点で、「ただし、英文抄録とその証明は掲載決定後に送付できる。」が追記されています。投稿にかかる費用を少しは下げることができたと考えています。

長倉美恵子先生が亡くなりました。長倉先生については今号に掲載されている前川会員による評伝をご覧くださいいただければと思うのですが、私としては、2017年のLISSASPAC JAPANの設立総会にて、「あなたはちゃんと英語を勉強しないとだめ」と叱っていただいたことを思い出します。それ以来私の英語は上達してはいないのですが、長倉先生がなさってきたことをいくらかでも引き継げればと考えているところです。

延期になっていたI-LISSと韓国図書館情報学会の共催の大会は2020年10月にオンラインで開催され、I-LISS Japanからは志保田会員・藤間会員が論文集への掲載の形で発表を行うとともに、私は口頭の発表も行いました。英語の発表はいつまで経っても慣れず、時間内に収めることができないという恥ずかしい結果で終わりました。I-LISS Japanの皆様には申し訳なく思っております。

そして、2020年の夏にインドで行われる予定であったI-LISSの大会は、インドの感染状況を考えると致し方ないところですが、2021年の春の段階でも延期のアナウンスが出されたままになっています。ワクチンの摂取により、再び海外での学会に参加できることを待ち望んでいるところです。

(編集次長 岡田大輔)